関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[書評] 石田浩著『台湾漢人村落の社会経済構造』

著者	松田 吉郎
雑誌名	關西大學經済論集
巻	36
号	1
ページ	195-205
発行年	1986-05-15
その他のタイトル	[Review] Hiroshi Ishida, Socio-economic Structure of Han's Villages in Taiwan
URL	http://hdl.handle.net/10112/14679

書　評

石田浩著『台湾漢人村落の社会経済構造』

（関西大学出版部，1985年３月30日発行）

松　田　吉　郎

本著は石田氏が 1978年３月～83年夏まで，何度か台湾を訪問調査してまとめたものである。あとがきにあるように，筆者は 1976年夏に，天野元之助先生（故人）の紹介により，森田明先生（現在，大阪市立大学文学部教授）と歓談する機会をもち，それがきっかけとなって，台湾史研究会の創設に加わり，その中で個人研究報告，文献の輪読を行うとともに，台湾の訪問調査を行ってきた。所収論文の大部分は筆者が大学院，オーバードクター時代という大変経済的にきびしい条件の中で，毎年のように台湾を訪問調査してまとめたもので，いわば筆者の「血と汗の結晶」ともいえるものが本書である。

まず，最初に本書の目次を掲げよう。

序章　台湾漢人村落研究の意義と課題

第１章　台湾の村廟について――廟を中心に見た村民の結合――

第２章　台湾南部における漢人村落の社会構造――台南県左鎮郷十カ村のフィールド・スタディ――

第３章　台湾南部の漢人村落における地縁・血縁構造――台南県左鎮郷左鎮村の簡同族の調査事例――

第４章　台湾中部における漢人村落の展開過程とその社会構造――南投県草屯鎮加老里の洪同族の調査事例――

第５章　台湾における祭祀公業の意義とその変容――中部台湾の同族組織の調査事例――

第６章　台湾北西部の漢人村落における地縁・血縁構造――桃園県新屋・観音両郷の村落実態調査――

第７章　台湾北東部漢人村落の形成とその展開――宜蘭県蘭陽平野の村落調査――

第８章　台湾における「拡大農場共同経営」の一考察――彰化県田中鎮の農業生産組織の事例――

終章　台湾漢人村落研究の総括と展望

あとがき

以下，各章の著者の論点を概説し，後にその成果と問題点を述べたい。

序章　台湾漢人村落研究の意義と課題では次のように述べる。

「日本人による戦後の台湾研究は，(1)光復後（第2次世界大戦後）の NICS と言われるまでに高度成長した台湾経済の研究，(2)領台時期の日本帝国主義による台湾植民地政策の研究，(3)『高山族』に対する民族学研究がその中心であり，筆者が関心を持って進めてきた漢人村落の社会経済構造に対する研究はこれまであまり行われてこなかった。」「その大きな原因は，1945年あるいは，1949年を境として，それ以前の台湾と以後の台湾とが全く関係ないがごとく切り離されている点」にあり，また「歴史分野の研究者において台湾史研究をおこなったり，台湾を訪問することをタブー視する時期が存在したことによる」（p. 1）と言う。こうした研究史において，筆者の「台湾漢人村落の社会経済構造研究の……二つの意義」は，「一つは，台湾が移民社会であり，アメリカにおける開拓がそうであったように非常にフロンティア精神に富み，活性化した社会」（p. 2）であり，また「台湾における高度経済成長の要因は移民社会としての活性化された歴史の中に求められるのではないか」ということ。「もう一つは，台湾漢人村落の社会経済構造を研究することによって，大陸農村の社会経済構造の分析に役立」ち，それは即ち，「華南農村社会研究との比較において役立つのであり，また，現在の社会主義化した，農村と比較する場合においても，現在の農村において解放前の伝統社会が幾分なりとも存在しているという意味において，有効性を持つ」（p. 3）ということにあると言う。以上の二つの意義を確認した上で，筆者が台湾漢人村落を訪問調査した結果，「どの村落においても基本的に村落という集団形成の原理においては，『同郷』（地縁結合）・『同族』（血縁結合）という中国村落において一般的に見られる社会形成の諸原理がみられた。筆者はこれを村廟と同族廟を通じて分析し，考察した。そして『同郷』『同族』という村落形成原理の視点から，これまでに行われてきた中国村落における『共同体論争』に対して，有効な分析視角を提示」（p. 5～6）しようと言う。

第1章　台湾の村廟について――廟を中心に見た村民の結合――では，「現在の（日本の研究者）のおおかたの見解としては『村落共同体』の存在を否定する傾向」にあり，これは，「中国農村においては農業生産を補完する共有地がほとんど存在せず，農業経営の独立性と村民間の社会的結合の微弱さでもって『村落共同体』は存在しないと結論づけられているからである。」「西ヨーロッパ的視点からは当然上記のような結論に落ち着くと考

えられる」が，「筆者は従来のこのような視点に対して異議を唱えるもの」(p. 7)である。「本章は上記の問題意識でもって 1978年3月12日より4月11日にかけて行った台湾農村調査の各事例をまとめたもので」，調査地域は「台北県樹林鎮東園里，圳安里，台中県大雅郷，南投県竹山鎮山崇里，彰化県田中鎮中潭里，台南県左鎮郷光和村，中正村，睦光村，左鎮村，宜蘭県冬山郷得安村，宜蘭市思源里」(p. 8〜9)であった。「その結果，台湾の村廟は，旧中国の村廟と同じように管理，運営されており，しかも台湾の『都市化・近代化』の過程においても衰退するどころか，根強く存在し，現在においても一定の機能を果たしていることがわかった」(p. 9)と言う。そして，調査村の概況と村廟，村廟の組織と運営について述べ，最後に村廟の意義と役割について述べる。それによると(1)「村民の廟信仰はひじょに篤」く，これは「農業生産と密接な関係がある」(p. 37)。(2)「廟祭時にかかる費用は村民が共同で負担しており，廟産のある廟はその収入でまかなっている」。(3)「廟が村の社会保障的機能を果たしている」。(4)「村民の廟に対する帰属意識を行政側は逆に利用し，廟に『活動中心』を設け，行政の上意下達機構たる村(里)民大会を『活動中心』で開いている」(p. 38)という内容であったと言う。

第2章　台湾南部における漢人村落の社会構造——台南県左鎮郷十カ村のフィールド・スタディ——では，「村落の社会構造を，(1)通婚圏，(2)祭祀圏，(3)市場圏，(4)農業における相互扶助，(5)同族関係，(6)冠婚葬祭の6項目にわたって考察し，さらに現在急速に進行しつつある農村の『近代化』『都市化』過程の中で，農村社会が如何に変貌しつつあるのか」(p. 40)をも考察している。「通婚圏は若者の都会へ出る機会が多くなるに従って拡大しており，しかもそれが現代的風潮だと見なされているが，(1)同姓婚がない，(2)『外省人』(1949年以後に大陸より渡台した漢人を指し，清代よりすでに渡台していた『内省人』と区別される……松田註)との結婚が少ない，(3)『平埔族』(高砂族の平地に在住し，漢人と対立関係にない人々……松田註)との結婚がないという事例と，同郷内結婚が高率であるという点から，現状の通婚圏はそれほど拡大しているとは考えられない」p. 48)。祭祀圏は「郷内の漢人は廟信仰，『平埔族』はキリスト教信仰と明確に区分されており」(p. 48)，「廟の最小の祭祀圏は部落にある」(p. 53)。「市場圏に関しては，道路網の整備，交通機関の発達により急速に崩れているが，草山，二寮，澄山の各村では交通の便が悪いため，村民の行動範囲は狭く，雑貨店の意義は大きい」(p. 59)。また，「村民の生産，生活の面において村民間の相互扶助が残っており，それが交通の便の悪い，すなわち生活の便の悪いところほど強固である」(p. 63)。同族関係は「Gallin が述べるように左鎮郷では，家族は分家後も同族として近隣に居住し，相互扶助を継続し，お互いに日常的に仕事を共

同するが，しかし『都市化』の中で離村し居住地域が異なったり，職種が異なれば同族結合は弱くなると考えられる。その中においても比較的強く残るものが……祖先祭祀である」(p. 66)。また，「結婚式，葬式，廟祭は同族や友人が集まる機会であり，旧交を暖めお互いの関係を再認識できる機会となっている」(p. 68)。そして，「『都市化』『近代化』による農村の疲弊に対して，村民が何らかの対処を行なえる基盤は廟を中心にした村民の結合様式にある」。「左鎮郷においては今後益々農民の社会領域は拡大して行くであろうが，それに対し，現在の地縁的血縁的関係は自らの生活防衛に大きな役割を果たしていく」(p. 69)と言う。

第3章　台湾南部の漢人村落における地縁・血縁構造――台南県左鎮郷左鎮村の簡同族の調査事例――では，「簡同族……の祭祀公業である『簡六合』と地縁組織である左鎮公厝……の組織とその運営について考察し，さらに血縁組織と地縁組織との関係について考察」(p. 71) する。その結果，「宗祠と村廟の関係を見ると，(1)両者の役員は共通しており，しかも部落の中心的人物である。②運営主体もほとんど共通している。……(3)宗祠の基金を部落建設や，廟への寄付に使っており，両者の関係は密接である」(p. 88) と言う。そして，この「宗祠・村廟の統合機能は，農業の衰退，若年層・中年層の都市への流出等の現象に見られる『都市化・近代化』の波が農村に押し寄せてくることによって如何に変質していくのであろうか」(p. 88) という問題に対して，筆者は具体的な言葉では表現していないが，「一定の機能を果たしていくものと考えられる」(p. 89) とし，宗祠・村廟の現代における統合機能の存続を主張する。

第4章　台湾中部における漢人村落の展開過程とその社会構造――南投県草屯鎮加老里の洪同族の調査事例――には，「村落形成過程で地縁組織や血縁組織が如何にして形成され，それらが村民の生活の再生産にとっていかなる意義を有し，そして現在ではどのような形態で存続し機能しているかを考察する」(p. 95)。そして筆者の永年の課題である「中国人の形成する社会諸織組を如何に理解するか」(p. 91) について，「共同体」の研究史をふまえて以下のように筆者の見解を整理する。「旧中国農村社会研究において，農村における社会組織としての村落を『共同体』と認識するかどうか」(p. 91) については「現在では 20世紀前半期の旧中国農村において『村落共同体』は存在しないとする説が有力である」(p. 91)。しかし，「要は『村落共同体』が存在したかどうかにあるのではなく，旧中国農村社会がどのような意味をもった社会であったかを理解することであり，その社会を認識するために普遍的歴史概念としての『共同体』という言葉を用いるならば，木村礎氏の述べるごとく『共同体』についての定義的見解をあらかじめ述べる必要がある」(p.

93)として，「共同体」という言葉を範疇的に規定せず無原則に使用することをいましめる。本文では書いていないが，註で筆者の「共同体」範疇について説明した。それによると，筆者はマルクスの「共同体」的範疇＝西ヨーロッパ封建社会の共同地を媒介とした「共同体」とは別の範疇としての「共同体」＝「生活共同体」を提示する(p. 93, 註(7))。しかし，本章では「共同体」そのものの範疇の構築を目指すのではなく，村落の「地縁・血縁的組織として」の「村廟や宗祠」(p. 94)の実態分析を通じて，中国史における「共同体」範疇の理論的再構成に向けての実証的基礎史料を提示しようとするものであった。それによると，「草屯地方の水利開発は乾隆年間に行われ，それ以後も拡張整備され」，その「水利開発は水田面積の増大だけでなく，単位面積当りの収量の増加や二期作化も可能」にし，台湾米の福建省への輸出は「乾隆年間に……急激に増大」した。こうした「農業生産力(の増大……松田註)による村落の経済的安定は，村民の共同的精神支柱としての神を祭祀する廟の建立を可能にした」(p. 103)。この「村落形成過程における村廟の建立」の意義は「様々な地域からの雑姓によって成立した村落を統合する」(p. 108)ことであった。その「村落の構成原理は当然大陸から持ち込まれてくるのであるが，一村落の原理をそっくりそのまま持ち込んだのではなく，言語，生活慣習を同じくする同郷レベルでの原理を持ち込んだ」(p. 108)。この「同郷レベル」とは同頁の註(50)(51)にあるように福建省の漳州，泉州，広東省の潮州といった州単位のもので，「同郷」というのはいわば郷党という意味を指している。「そして，耕作開墾競争の中で経済的に発展した族はなお大陸から同族を呼び寄せ聚居し，宗祠を建立し，祭祀企業を設定して同族の団結を強めて行く。このような同族結合は村落形成以後のこと」(p. 108)であるという。筆者は台湾移住初期の雑姓で構成され，村廟を核とした村落結合及びその構成原理と台湾の開発が進みこの雑姓村落が陶汰され大族による弱小族を支配，駆逐し，大族の宗祠及びその祖先崇拝事業である祭祀公業を核とした村落結合及びその構成原理とを明確に区別した。この村落構成原理の変化，すなわち「同郷」原理から「同族」原理への移行が台湾村落の発展史であるとする。そしてこの「同郷」原理にもとづく「村落という地縁組織」と「同族」原理にもとづく「同族という血縁組織」の「両組織集団は併存し相補いあいながら社会組織の基本集団として存続」(p. 110)した。次に「祭祀公業地」の役割を考察し，それは「祖先祭祀だけでなく同族扶助の経済的基盤であった」ということと「移民・開墾生活に伴う諸困難」に対する同族の団結(p. 124)であったが，現在はこの両者の意味あいが弱まっている。しかし現在も「毎年の祭祀を行なうことは他族に対して自族の伝統を誇ろうとするものであり，より一層の自族の社会的ステータスを高めようとするならば，『同族』より

もさらに大きな枠組が必要となり，『同姓』という基盤に基づく組織をも形成する」（p. 125）という。また「現在の台湾の地縁・血縁組織は変容の過渡期」にあるが「かつての日本農村が1960年代に急激な変化を被ったように，台湾農村も同じような道を進む」のではない。なぜなら「台湾経済の基礎は弱く，現在の発展も頭打ちとなり，結局のところ村民は自らの生活の再生産を保障するものとして，地縁・血縁組織に依拠しなければならない構造が続く」（p. 140）という。

第5章　台湾における祭祀公業の意義とその変容――中部台湾の同族組織の調査事例――では，「(1)台湾の平地は開墾しつくされている。(2)開拓期に同族互助を求めた要因は弱まり，しかも日本による統治，光復後の土地改革等により公業地は減少し，祭祀の財政的基盤が弱体化している。(3)移民後数百年が経過し，祖先に対する意識の変化も予想される」という「現在の条件下で祭祀公業がどのような組織を持ち，どのような内容で運営されているか」を紹介し，「祭祀公業の意義が那辺にあって，近年の社会変動の中でそれらが如何に変容しているのかを……考察」（p. 143）した。即ち，「祭祀公業は自己の共通の祖先を祀るために財産を設け，その財産を基盤にして毎年春秋の祭祀を行なうとともに，同族の子弟の婚費や奨学金，貧困者や寡婦への援助費等にも使用し，移民社会における同族の団結を維持，強化するために設立された」（p. 157）。しかし，「大正12年（1923年）1月1日より施行された勅令407号により，祭祀公業は新たに設立することができなく」（p. 157）なり，また，光復後の「土地改革により弱体化したと考えられる。さらに，近年の『都市化』は地価を上昇させ，公業地からの収益では納税が困難になるという状況を生みだした」（p. 159）。こうしたことから「祭祀公業はかつての多面的機能をもつものかするもの縮小の過程をたどりつつある。こうした状況下で，祭祀公業の一部の機能を代替するものとして『宗親会』の存在が大きくなりつつある」（p. 159）。「宗親会」とは「弱小族が有力な同族に対し，大いに幅をきかせて自己の生活に安定感を得るために」，「同族の範囲を広く」し，「合族祠」（p. 154）を設立して運営されるものであった。「今後，その重要性は更に増す」（p. 159）という。

第6章　台湾北西部の漢人村落における地縁・血縁構造――桃園県新屋，観音両郷の村落実態調査――では，「漢人移民」が開拓過程で「同郷（地縁）組織と同族組織を如何にして形成し，そしてそれらの組織が現在どのような形態で存在しているかを調査した」（p. 161）。その結果，「（新屋・観音）両郷の住民の多くが広東省恵州府陸豊県出身の客家人で客家語を話し，福建省出身者（福佬）がわずかであり，非常に同族結合が強い」（p. 161）こと，また「日本統治時代末期に皇民化政策の一環として，中壢神社を建立して住

民にこれを信仰させ，これまでの廟信仰を俗信だとして廟整理を行っていた」(p. 162) ため，「両郷には廟が非常に少な」(p. 162) かった。よって「近年，小祠から村民が金を出し合って間口一間程度の土地廟に重建され」(p. 163) た。すなわち，「同族結合の強い村落は移民社会初期の土地公しかなく，村廟の建立にまでは至らない」(p. 163) という。以上の論点を地縁構造，血縁構造の両節で具体的に考察した。すなわち「客家人は大陸に居た時から土着の漢人から差別され，そのため両者の摩擦が土客械闘に発生することもしばしばで，彼らは客家人であることに自らのアイデンティティを求め結合し，また，日常生活においては同族結合を強め，自らの生活防衛の糧として来た。そのような結合原理が移民した厳しい社会環境の中に持ち込まれ，分類械闘や祭祀圏の広い廟の建立，あるいは……家廟（同族廟）の建立という形になって現出した……。それゆえ自然村（部落）としてのコミュニティは充分展開せず，その象徴としての土地公はあるものの村廟にまで発展せず，同族結合が地縁結合にとって替わり，現在に至っている」(p. 189, 194)。一方，血縁構造については，「渡台，開拓が一族郎党を引き連れた同族集団として行われているのではなく，単婚家族あるいは兄弟という少人数で行われている……。ということは入植当初から同族結合が強固に存在したのではなく，開墾地を拡大し，水利灌漑施設を設け，その結果農業生産力を高め，また，同族構成員数も増加することによって，漸く族的結合が可能となった」(p. 211) という。

第7章　台湾北東部漢人村落の形成とその展開——宜蘭県蘭陽平野の村落調査——では，蘭陽平野の開発の特徴は，「(1)比較的開発が遅く，当初の開墾集団が大きく変質するまでの時間的余裕もなく，近年に至るまで村落に開墾集団の特徴を色濃く残している。(2)……先住民の『平埔族』『高山族』との緊張関係により，侵略者である漢人は個々に入植することは出来ず，武装した隘勇（漢人の義勇兵……松田註）を伴い各集団で徐々に侵入した。そして，その開墾集団が開墾地に定着し村落を形成した」(p. 219) ということであった。「本章では以上のような特徴をもつ宜蘭県蘭陽平野における村落の形成とその形態について考察し，このことを通じて中国人社会の社会構成諸原理の存在形態をも追求する」(p. 219)。

その結果，「宜蘭における開発形態は台湾西部とは異なり，武装した装丁を率い，開墾集団毎に原野を開墾し定着していった」(p. 291)。こうした結首（開墾集団のリーダー……松田註）を中心にした開墾集団による開墾という特殊性と「政府による業戸の廃除」(p. 243) 政策によって「漢人の大租は存在」せず (p. 244)，土地所有関係が墾戸—佃戸関係から「大租戸，小租戸，現耕佃人への転化が見られ」(p. 239) なかった。また「開

墾集団は『高山族』の襲撃から身を守るために，刺竹や土・石で村落を囲み，地縁集団へ発展していった。村落形成後，更なる農業生産力の発展のため水利開発を行うが大規模な埤圳の開発は村外の富戸によって行なわれ……また，小規模の佃埤圳は村落内の業佃戸の協力により開設されるが，これは村落内の地縁的結合に依拠したもので」あった。「このような水利開発に伴う農業生産力の発展が異族間の蓄積に格差を生じさせるには，宜蘭においてはその歴史が比較的浅く，その結果，地縁結合から同族結合への移行は不十分であり，基本的には地縁結合＝『同郷』原理でもって農業の再生産を保障してきた」(p. 292) という。

第8章　台湾における「拡大農場共同経営」の一考察――彰化県田中鎮の農業生産組織の事例――では，「中潭里拡大農場」の成功を紹介する。その原因は「第1に，同族，地縁を基盤に組織されている……。第2に，投資，出役に対する班員間の平等分配原則が見られた。第3に，『拡大農場』は委託者にとっても合理的である。すなわち，工業化の進展に伴って農民の脱農業，兼業化が見られるが，土地所有者が耕地を小作に出すと『三七五減租』……により小作権が設定され，いざ耕地を処分しようとしても容易に処分できない。それゆえ『農業発展条例』で認められた『雇工代耕制』の方が安心である。……第4に，受託者にとっても自有地の収穫を除いて各作期毎に……収入があり，委託者との利害が一致する」(p. 309) という点があった。よって「台湾の工業化の進展により，今後ますます『拡大農場』の重要性は増大する」(p. 310) という。

終章　台湾漢人村落研究の総括と展望では，筆者が大学，大学院時代に育んできた問題意識である「市民社会」の対立概念としての中国の「共同体」の実存形態をどう考えるかという問題を解く手懸を中国の「同郷」「同族」といった社会構成原理に求めた (p. 314)。しかし，「中国には（マルクスが言う……評者註）共同体的土地所有を媒介にした『共同体』は存在しなかった」(p. 315)。しからば，中国社会において存在するものは何かというと，筆者は「中国的『共同体』」(p. 315) と言う。それは「共同体的土地所有に代わるものとして人的結合があり，その具体的結合原理が…『同郷』『同族』である」(p. 315)。しかし「この人的結合の経済的基礎は……物的な形態では『無い』」。「にもかかわらず何故，中国においてこのような人的結合が存在するかと言えば，物的生産力が低く，しかも政治的，社会的，経済的不安定性が存在し，個々人は自立して生存できず，何らかの社会組織に帰属して自らの生活の再生産を計らねばならないからであ」(p. 315) り，こうした「人的結合」は現在でも「到るところに見られ」(p. 316) るという。

以上，筆者の論点の概要を述べてきたが，筆者の論旨を不十分にしか伝えられなかった

面も多々あろうかと思われるが，その点は御寛恕願い，以下，評者が気付いた本書の成果と問題点について述べよう。

まず，本書の成果の第一は，本書が戦後，日本で最初の本格的な台湾漢人村落研究であるということである。筆者も序章で述べているように，戦後の日本の研究者の問題視角のかたよりがあり，台湾漢人村落の歴史的，フィールドワーク的研究は十分行われてこなかった。これに対して，筆者は未開拓な分野をまさしく「フロンティア」精神で研究された。本書は，後学の者が台湾漢人村落を研究する場合，本書の成果を避けては通れないものと言えよう。

第二は，村落の分析視角として，その「社会構成原理」を血縁構造と地縁構造の二側面に分けて考えたことである。血縁構造=同族，その核となる宗祠と地縁構造=同郷，その核となる村廟に分け，地縁構造から血縁構造への発展が台湾村落に共通している点をあげた（ただ，客家のような特殊例で地縁関係が十分発展せず，血縁関係が強いものはそれとして分析しているが)。この点は大きな意義と言えよう。

第三は，上記の同族，同郷結合を宗祠，村廟の組織，運営を考察することによって明らかにしようとされたことである。これによって宗祠，村廟の組織，運営，そしてこれらの村落における役割が具体的に判明した。

第四は，フィールドワークによる村民からの聞き取り調査の資料を有効に活用するため，村落の歴史に関する文献資料を考察し，フィールドワークと歴史研究の両者の結合を行ったことである。従来，台湾に関してフィールドワークはそれ独自の研究があり，歴史もそれ独自の研究があったが，その両者の成果を積極的にとり入れ，両者の接点を解明する研究はなかったと言っても過言ではない。この点，筆者はだいたんに行われたのであり，その意義は評価されねばならない。

第五は，第三で述べたフィールドワークと歴史の資料の大半は筆者が独自に発掘した資料であることである。例えば，本書には宗祠や村廟の写真が多く掲載されているが，これらはすべて筆者が自から台湾を訪問，調査して撮影してきたものである。この一つの事例からも理解できるように，筆者のねばり強い努力と大いなる探究心によって，まさしく未開拓分野を開拓されたのである。

第六は，「共同体」論争について，筆者は一定の見解をしめしたことである。中国においてはマルクスの「共同体」的範疇=西ヨーロッパ封建社会の共同地を媒介とした「共同体」とは別の意味の「共同体」=「生活共同体」を提示したことである。その「生活共同体」の現実の実現形態が村廟を中心とした「同郷」的結合，宗祠を中心とした「同族」的

結合であった。論点の当否は別として，「共同体」論争に一石を投じたものと言えよう。

以上のような本書の成果をふまえて，以下評者の感じた問題点を指摘しよう。

第一に，宗祠・村廟の各々の組織・運営の分析から村落の社会経済構造を結論できるのか，ということである。確かに，筆者が言うように村廟や宗祠が村落民衆の結合の重要な要素になっていたことは確であるが，本書の題名を『台湾漢人村落の社会構造』とするからには，社会経済の多面的な要素を論証しなければならないのではないかと考える。筆者も重々感じておられることであろうと思うが，最低限，村落の再生産構造，流通構造，市場構造，村落における行政組織，村落運営機関，村民どうしの日常的なつながりの実態について分析しないと，本書の題名どおりにはならないと考える。しかし，フィールドワークというものは現地に行ってみて，現地の人々に会ってみないと，どういう内容を聞きだせるかわからないという限界性をもっており，訪問する前にいくら綿密に計画をくみたて，論理構成を考えていても，それがその通りに実現するかどうかわからないというのが実情であろうと考える。であるから，評者の注文はまさしく「ないものねだり」ではあるが，筆者の今後の一層の研究の発展を期待する上での注文である。

第二に，フィールドワークと歴史研究の結合を目ざした点は筆者のオリジナルで，大変意義のあるものであるが，しかし，筆者の意図にくらべて，本書ではまだ十分，歴史研究とフィールドワークの成果がかみあっていないのではないかという感想をもつ。筆者は村落の変遷，開墾過程，水利開発を歴史資料にもとづいて論証しているが，それと現在の村落，土地利用，水利運営とどう関っているのかについて十分に考察されていないこと。また，清代の各村落の村廟，宗祠の運営，組織と現在の各村落の村廟，宗祠の運営，組織との関連についても十分考察されていないことである。よって，本書の考察では歴史研究とフィールドワークとの有機的連関性が不明確であったと考える。しかし，筆者が東洋史畑の出身ではなく，農業経済畑の出身である点から考えて，以上の評者の指摘も筆者に責めが問われるものではないと言えよう。むしろ，評者を含めた東洋史研究にたずさわる者が筆者の問題提起をうけて，清代の村落，宗祠，村廟の運営，組織について研究していかねばならないものと言えよう。

第三は生活「共同体」概念についてである。筆者は生活という点を「共同体」の重要構成要素として考えられ，その生活を「共同体」的に補償する実現形態が村廟や宗祠だと言う。確かに，冠婚葬祭等個人の力ではどうしようもないときに「同郷」「同族」結合によって補償されるが，生活といういう内容は何も非日常生活だけでなく日常生活が重要な問題である。日常生活をいかにして，どのような集団で補償していたかとなると，それは工

鉱業，農林漁業，サービス業といった職場があり，そこからえた賃金や農林漁業収穫物によって成り立っているのである。そのような賃金や収穫物を家族単位，宗族，一部は村落を含めた単位で消費し，各々の集団でおたがいに管理・運営しているのである。すなわち，生活というのは再生産構造との関連を考えなくては解明できないのではないかということである。因って，生活「共同体」というからには日常的・非日常的な生活で何がその結合を規定していたのかを問う必要があるのではないかと考える。また，筆者の言うとおり，マルクスの言うような共同地を媒介とした共同体は中国には存在しないと言ってよいであろう。しかし，再生産構造を考えると，個々人の農民の経営だけで再生産は完結していたのであろうか。共同地はなくとも，水利施設の運営，生産手段である農具や家畜や種子のかしかり，盗賊からの村落の防衛等で村落民や宗族単位での結合があったのではないのか。これらを一言で生活「共同体」といって解決できるものであろうかと考える。

第四は，些細な問題であるが，台湾，中国の特殊用語をもう少し，わかりやすい言葉で説明してほしかったということである。例えば，祭祀公業という言葉はひんぱんにでてくるが宗祠と祭祀公業の関連及びその内容などが不明確であった。

以上，評者の恣意的評論を述べたが，今後一層石田氏の台湾，大陸の村落研究の発展を期待するとともに，評者を含めた後学の者が石田氏の著書につづいて研究成果を上げてゆかねばならないと考える。